

生きたが勝ちと言うのなら

中三 鈴木 美愛

なぜこのエッセイ『いじめの憂鬱』はこんなにも私の心を動かしたのだろうか？

いじめを受け、自殺する人達の行為は逃避ではなく抗議であると述べた池田晶子さんに反論したいと思いました。その後、エッセイで池田さん自身がその言葉に反論していたが、似ていたものの、私の意見とは少し異なるところがありました。

池田さんは、いじめられた子は死をもって抗議し、その死によって永久に罰を負えと指名されたいじめっ子達が罰を感じていなかった場合、馬鹿を見たのは死んだその子の方であると書いていました。確かにそれはそうですが、私の考えとは違います。自殺は証明なのではないのでしょうか。自分がどれだけ苦しく、孤独な日々を迎え、自分を追い詰め続けてこの結果に辿り着いたのか。けれども、それも池田さんが言っていた事とほぼ同じであり、逃避だと気が付いたのはこのエッセイを読んだ、時間が経ってからです。

『傷だらけの悪魔』は、いじめを描いたストーリーです。ある場面で、中学時代いじめられていた子が当時いじめていた子の目の前で自殺しようとしてました。しかし、いじめていた子の方は顔色の一つも変えず、「で？」と言い、去っていきました。このように、動揺の欠片もなければ自殺など何一つ抗議になりません。自殺はただ生きる事に対し、覚悟のできていない弱さを証明しているだけです。

けれど、池田さんは「人間には命よりも大事なものがあるから、この行為は成立すること語ってました。違います。「命を賭けた行為」などではない。池田さんの言う、「命よりも大事なもの」とは何に例えているのかはまだ分かりません。これという決まったものはないのかもしれない。しかし、私は命よりも大事なものはないと思っています。命が大事だからこそ、他にも大切なもの、大事なものがあるのだと思います。幸せ、絆、夢や希望、これらは掴もうとすればチャンスは何度でも訪れます。けれど、命は一人の人間につき一つしかありません。死ねばもうチャンスは二度と来ません。それは自分だけではなく、他の人も同じです。自分の命を大事にすると同時に、他人の命もとても大事です。

「人間には命よりも大事なものがある」

この言葉には、池田さんが伝えたいこと、そのままの意味が詰まっているのは分かります。けれど、私はその言葉の裏をかく事で、改めて命の大事さに気が付かされました。そして命が大事だからこそ、人間には数えきれないほどの大切なものや、大事にしたいものがあるということも。私は、このエッセイを読み、生きることの覚悟を改めて実感しました。と同時に、生きる勇氣も貰いました。命の大切さを知り、それによって私や他人が他にも大事にしているものたちに気が付くことができました。『いじめの憂鬱』に納得できなかったところは多かったですけれども、私はこのエッセイに出会い、生きることに対し甘ったるいことを考えていた自分を見直すことができ、心の底から良かったと思っています。

最後に、池田晶子さんは「生きたが勝ちと言うのなら、見てろよ、殺したが勝ちだぜ」と、書いていました。けれど私の場合は、「生きたが勝ちと言うのなら、見てろよ、楽しんだが勝ちだぜ」の方がしっくりきます。せつかく生きてきたのだから、いじめを受けて自殺するよりも、困難に立ち向かい、その先の絶景を見ているのもいいでしょう。生きる価値は誰にでもあります。それに気がつくかどうかは、自分次第だと思います。